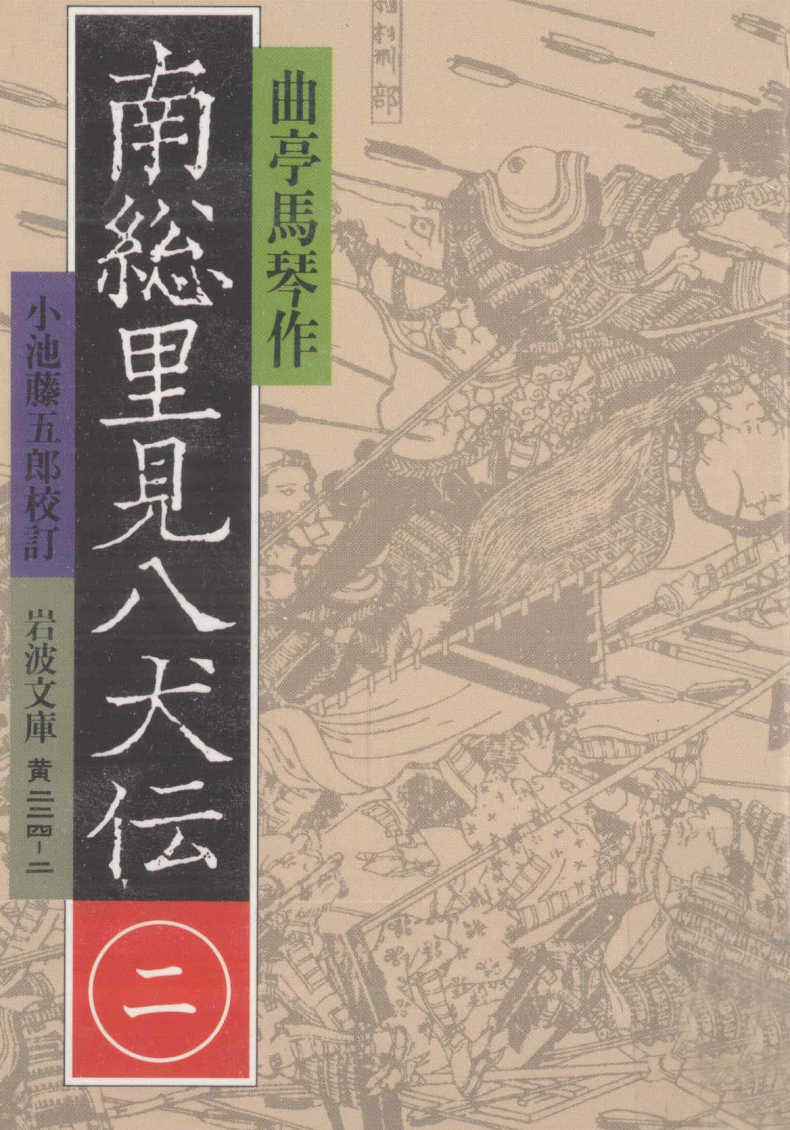
南総里見八犬伝

曲亭馬琴作

小池藤五郎校訂

岩波文庫 黄三三四―二

二



江苏工业学院图书馆
藏书章

岩波文庫
30-224-2

南総里見八犬伝

(二)

曲亭馬琴作
小池藤五郎校訂

岩波書店

南総里見八犬伝(二)〔全10冊〕

1990年7月16日　第1刷発行 ©
1992年1月20日　第2刷発行

校訂者　小池藤五郎

発行者　安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-3265-4111(案内)

印刷・精興社
製本・桂川製本

定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan
ISBN4-00-302242-4

解説

儁異雄大の構想と艶麗豪壮の文章、『八犬伝』は全く当時の読書界を風靡し、その流行は驚くべきほどで、天保二年には八犬士を東錦絵に刷出した。歌舞伎では「傾城の八文字は閥の勝閥 里見の八犬士は廓の先陣 花魁菩八総」(天保七年正月初演。西沢一鳳等脚色)は、肇輯から第八輯の対牛楼までを、かなり忠実に脚色し、大阪中の芝居において、正月・二月に芳流閣までを、残りを三月・四月に上演して喝采を博した。江戸の興行は僅かに遅れた森田座の「八犬伝評判楼閣」(天保七年四月十七日初演。宝田寿助等脚色)で、夢幻的・歌舞伎的脚色で非常に当てた。市村座の「歳戊里見八熟梅」(天保九年閏四月十五日初演。二代中村重助脚色)は、二度目の大入り大当りであったが、仕組は森田座興行のそれに劣る。

天保八年には京都で金襴緞子に八犬士を織出し、帯・煙草入・鼻紙入その他に用いられたらしく、続いて各種の物品に『八犬伝』を意匠することが時の流行となった。

浄瑠璃に仕立てた「南総里見八犬士伝 梅魁菩八総」(天保七年七月廿五日上演。添削山田案山子)は稲荷境内、名代枡屋五兵衛の操人形にかかり、場数が多いため、「前咲六株」「後咲六株」のごとくに初日・後日の両日に分け、幕なしで一日替りに演じた。常磐津の「八犬義士誉勇猛」などのほか、合巻に『雪梅芳譚犬の草紙』(別名、『八犬伝犬の草紙』。笠亭仙果作、二世豊国画。嘉永元年初編刊、明治初年第

六十編完結)、『仮名読八犬伝』(二世為永春水作、歌川国芳画。嘉永元年初輯刊、嘉永五年第十六編刊)、『八犬伝後日譚』(二世為永春水、仮名垣魯文等作、歌川国芳画。嘉永六年第十七、十八編刊、明治元年第卅一編刊)等後塵を拝する大部の作品がある。『八犬伝』の批評には『犬夷評判記』(三枝園批評、櫟亭琴魚考訂、曲亭馬琴答述。文政元年刊)、中傷的の著作には『赤水余稿』(五島文敏著。文化五年)等が有名である。諸方の寄席には『八犬伝』の講釈がかかり、馬琴の孫の太郎さえも木戸銭その他として六十八文の小遣銭を祖父から貰い、弘化二年六月二十二日四谷荒木横町へ聞きに行った。『八犬伝』の流行は誠に広く、賤山がつも漁夫・船頭も、八犬士の讃美者であった。しかしながら、『八犬伝』の流行には儒者の嫉視があった。

今朝五ツ半時頃丁子屋平兵衛来る。我等対面。手みやげ三種持参。八犬伝の事、聖堂附儒者より林家へ申立絶板に可レ成由、ある人より被レ告候者二三人有レ之、種々心配致、ある人を以て林家へ内々申入、漸く無異に可レ納由被レ告レ之云々(天保十四年七月廿七日、『馬琴日記』)

結局、『八犬伝』絶版の件も、林大学頭への歎願によって宥されたらしい。幕府の文教政策に表面的には協力するが、深く秘めた裏面の実際は、むしろ逆である点に、当局の眼が及んだためか。

天保の改革には林大学頭(述斎)の次子鳥居耀蔵が江戸町奉行として活躍し、儒学の家の出身ゆえ、漢学擁護の意味で蘭学者を処罰し、また洋式兵制圧迫をも行った。とにかく『八犬伝』の絶

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

版は、表面的には筋が立たず、尊王思想の底流が不埒とは、書物奉行渋川六蔵らには言えない弱味があった。感情が鋭く頭の切れる馬琴は、しばしば絵師・出版書肆・彫師らと衝突し、その顚末を細かく記しておいた。壮年の彼の「俠」は、老年には「従」に変り、絶版問題の後は、一段と「和」の傾向を強めた。絶版問題を書き残したかったろうが、胸をなでて用心し、日記の記事以外、何一つ残していない。それでもと思い、昭和元年頃から史料を捜してみたが、全く摑めない。「稗史作法」の隠微は『八犬伝』の内容、絶版問題の経緯は、特に警戒して書かなかったらしい。

（昭和十二年七月）

凡例

一、校訂には『南総里見八犬伝』の初版本を用い、校正は毎回原本に拠って厳重に行った。

一、読みやすくするために、左の諸点に特色を持たせたほかは、全く原本通りにして置いた。

(1) 本文に段落を設け、詞には鉤(「)を施し、仮名の濁点・半濁点は適宜に補った。

(2) 冒頭の漢文の序の繫符(—)を除き、目録は仮名交りに改めて本文中の回号に一致させた。

(3) 本文中に和歌・詩文・その他が挿まれている場合には、それを抜出して別行とした。

(4) 原本の文章はすべて句点(。)で切ってあるが、それを読点(、)・句点(。)に分けて用いた。名詞を重ねた場合で、原文に句点がない時だけ、並列点(・)を附けて置いた。

(5) 原本中の文字・仮名づかいの甚だしい誤謬——例えば「城平等」を「城兵等」に、「聡察叡智」の「そうさつはいち」を「そうさつえいち」に訂正——は訂正して置いた。

(6) 原本の仮名づかいは「亡父」・「滅亡」、「亀篠」・「亀篠」等の如くに、同一の文字についてもしばしば不統一である。かかる点は、むしろ時代の仮名づかいと、作者自身の特徴とを知る上から、原本通りにした。ただし「人物一覧」には多く用いられている方を振って置いた。

（7）馬琴の特色ある文字使用法を保存するために、極力原本通りの漢字を用いた。ただし「也」・「歟」その他を仮名書にした。「漁夫」の如き場合には左側の片仮名のみを削った。

〔編集付記〕

旧岩波文庫版『南総里見八犬伝』全十巻（小池藤五郎校訂、昭和十二～十六年刊）を改版するにあたって左の改変をくわえた。

一、旧岩波文庫版を底本とし、国立国会図書館蔵の初版本『南総里見八犬伝』（架蔵番号別三―一〇六―二）と対校して誤植などを訂した。

一、右国会図書館本により、旧岩波文庫版で省かれていた挿絵を余すところなく補った。

一、漢字は新字体を用いたが、仮名づかいは初版本どおりとした。

一、底本で使われている迯・羣・霽・胷などの異体字を通行の漢字（逃・群・腰・胸）に改めた。

一、読みやすさの便をはかって振り仮名の一部を省略したが、人名・地名などの固有名詞はこの限りではない。

一、底本の（　）は原本の割注を示しているが、今回これを〔　〕に改めた。原本の欄外注は［　］に収めた。

一、各輯の総目録は訓み下し文に改めたが、本文中の回号との異同は初版本のままとした。

（一九八四年十一月、岩波文庫編集部）

一、本書は、一九八四年十一月から一九八五年八月に刊行した『南総里見八犬伝』全十巻（小池藤五郎校訂、四六判）を文庫化したものである。

（一九九〇年五月、岩波文庫編集部）

話の筋（第二巻の分）

〔第三輯〕

犬塚信乃は蟇六方に引取られ、末は浜路の壻となることになった。蟇六は村雨丸を奪おうとするが、信乃の用心が厳しくてそれも出来ず、何時しか文明九年となり、信乃は十八歳の偉丈夫、浜路は十六歳の美女となった。時に武蔵国豊嶋の城主豊嶋信盛・煉馬の城主煉馬倍盛は、山内・扇谷の両管領と戦って亡びた。実父が煉馬の家臣であると聞いた浜路は、親恋しさの思いに堪えない。糠助はかつて許我成氏の家来に実子の玄吉をやったが、玄吉の体に牡丹の花の形の痣があることと守袋の中の霊玉を証拠に、玄吉を捜してくれと、臨終の際に信乃に依頼した。陣代の簸上宮六が浜路を見染めて結婚を申込んで来たことを蟇六は喜び、信乃の村雨丸を彼はすりかえた上で、宝刀献上に信乃を許我へ旅立たせた。ところが網乾左母二郎は村雨丸と浜路を奪って逃げ、本郷の円塚山で煉馬の老臣犬山道策の子の犬山道節に殺され、村雨丸はその手に渡った。左母二郎に斬られた浜路は、道節が異母兄、道策が父と知り、信乃に操を立てて死んで行く。結婚に破れた宮六は蟇六夫婦を殺したが、額蔵（犬川荘助）は宮六を討って主人の仇を報じ、宮六の弟の社平に捕えられた。許我についた信乃は村雨丸がすりかえられていたことを知った。信乃は敵

の間諜と疑われ、重囲を脱して芳流閣上に逃げ上り、捕縛に向かった勇士犬飼見八と屋根の上で格闘をはじめた。

〔第四輯〕

信乃と見八とは組合ったまま、真下を流れる坂東太郎の岸に繋いだ小船の中に落ちた。そのはずみで綱が切れ、気絶した二勇士を乗せて船は流れ出し、葛飾の行徳の浦に流れ着いて、宿屋の主人の古那屋文五兵衛に救われた。この文五兵衛は神余光弘を護って討たれた那古七郎の弟で、倅の小文吾は勇士である。犬飼見八は信の字の霊玉、小文吾は悌の字の霊玉を持っていた。信乃・見八は古那屋に匿われたが、信乃の傷は破傷風となって命が危く、見八は薬を買いに出て行った。その後へ許我の家来の新織帆大夫が信乃を召捕りに来て、文五兵衛を人質とし、小文吾に信乃を討てと命じて去った。小文吾は信乃を護って危い立場となり、事情を知った山林房八は、信乃を訴えると見せかけて、妻の沼蘭と共に小文吾の手にかかった。それは自ら信乃の身代りになって、絶体絶命の小文吾を救うためであった。房八と沼蘭の生血で信乃の破傷風は全快した。伏姫が自害の折に飛び散った八個の霊玉と、里見家を助ける勇士とを、丶大法師と蜑崎照文が捜して歩き、この時二人は古那屋に宿り合せていた。房八の子の犬江親兵衛には、見八（現八）・信乃・小文吾・額蔵と同様の牡丹形の痣と霊玉とがあり、八犬士はこれで五人までは知れたのである。信乃・現八・小文吾・丶大法師らが前後して大塚の額蔵を訪れた留守に、房八の母の妙真を

恋慕する悪漢暴風の舵九郎のために一事件が起り、照文・文五兵衛の苦闘もその甲斐なく、幼少の親兵衛は暴風に攫まれ、命は風前の燈火に等しかった。その時に突如として黒雲が舵九郎を捲き上げ、引裂いて空中から落し、親兵衛はそれと共に神隠しにあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

主要人物一覧（第二巻の分）

信乃・蕞六・亀篠・浜路（幼名は正月）・糠助・額蔵　第一巻を見よ。

背助　大塚蕞六の下男。

豊嶋勘解由左衛門尉信盛　武蔵国豊嶋の領主。長尾景春に味方して亡びた。

煉馬平左衛門倍盛　豊嶋信盛の弟。煉馬の館に住んでいたが池袋の戦で戦死した。

巨田備中介持資・植杉刑部少輔・千葉介自胤　管領家の命令で豊嶋・煉馬の一党を亡ぼした。

○犬飼見八信道　幼名は玄吉。安房の百姓糠助の子、成氏の家来犬飼見兵衛に養われた。後に現八と改名。八犬士の一人。

簸上宮六　大塚の城主の大石兵衛の陣代。簸上蛇太夫の倅。浜路を恋してこれと結婚しようとした。後に額蔵に殺された。

軍木五倍二・卒川菴八　宮六の下役。浜路を宮六に取持ったが、後に庚申塚で信乃・見八に殺された。

網乾左母二郎　元は上杉定正の近習。浪人となって大塚に住み、浜路を奪って逐電しようとして、犬山道節に殺された。

寂寞道人肩柳
○犬山道節忠与
お是非
黒白
犬山貞与入道道策
亀門三宝平五行
許我成氏
横堀史在村
新織帆大夫敦光
古那屋文五兵衛
○犬田小文吾
沼蘭
山林房八
念玉
観得
○犬江親兵衛仁
妙真
暴風舵九郎

犬山貞与入道道策の子。浜路の異母兄。犬山道節の変名。
八犬士の一人。
犬山道策の妾。犬山道節の母。後に本妻になった。
犬山道策の妾。浜路の母。
煉馬の老臣。道節・浜路の実父。池袋の戦で戦死した。
上杉定正の臣。池袋の戦で犬山道策を討ち、後に犬山道節に討たれた。
足利持氏の子。許我の城主。
許我成氏の執権。
許我成氏の家来。信乃を逮捕に古那屋に向かった。「帆太夫」とも記してある。
下総国行徳の宿屋の主人。元は神余光弘の臣。小文吾・沼蘭の父。
文五兵衛の倅。八犬士の一人。
文五兵衛の娘。山林房八に嫁して、八犬士の一人の犬江親兵衛を生んだ。
房八郎とも言う。下総国市川の「船主」。沼蘭の夫。
鎌倉の修験者。実は、大法師の変名。
鎌倉の修験者。実は蟹崎十一郎照文の変名。
山林房八の子。八犬士の一人。
山林房八の母。沼蘭の姑。
下総国市川の無頼漢。後に神霊に引裂かれて死んだ。

目　次

解　説
凡例・編集付記
話の筋（第二巻の分）
主要人物一覧（第二巻の分）

南総里見八犬伝（二）

八犬伝第三輯叙
南総里見八犬伝　第三輯総目録

第三輯巻之一

第二十一回　額蔵間諜信乃を全す　犬塚懐旧青梅を観る……二

第二十二回　浜路窃に親族を悼む　糠助病て其子を思ふ　……三

第三輯巻之二

第二十三回　犬塚義遺託を諾く　網乾漫歌曲を売る　……四三

第二十四回　軍木媒して荘官に説く　墓六偽りて神宮に漁す　……五八

第三輯巻之三

第二十五回　情を含て浜路憂苦を訟ふ　奸を告て額蔵主家に還る　……七七

第二十六回　権を弄て墨官婚夕を促す　殺を示して頑父再醮を羞む　……九八

第三輯巻之四

第二十七回　左母二郎夜新人を略奪す　寂寞道人見に円塚に火定す　……一一〇

第二十八回　仇を罵て浜路節に死す　族を認て忠与 故 を譚る……一三五

第三輯巻之五

第二十九回　双玉を相換て額蔵類を識る　両敵に相遇て義奴怨を報ふ……一四九

第三十回　芳流閣上に信乃血戦す　坂東河原に見八勇を顕す……一七三

八犬伝第四輯叙

南総里見八犬伝　第四輯目録

第四輯巻之一

第三十一回　水閣の扁舟両雄を資く　江村の釣翁双狗を認る……一九五

第三十二回　栁櫂を除て少年号を得たり　角觝を試て修験 争 を解く……二二一

第四輯巻之二

第三十三回　小文吾夜麻衣を喪ふ　現八郎遠く良薬を求む……二二七

第三十四回　栗崎に房八宿恨を霽す　藁塚に犬田急難を緩す……二四六

第四輯巻之三

第三十五回　念玉、虚に笛を借る　妙真、哀て婦を返す……二六四

第三十六回　忍を破りて犬田山林と戦ふ　怨を含て沼蘭四大を傷害す……二八六

第四輯巻之四

第三十七回　病客薬を辞して齢を延ぶ　俠者身を殺して仁を得たり……三〇三

第三十八回　戸外を戍りて一犬間者を拉ぐ　徴書を返して四彦来使に辞す……三二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton